

Press Release 2026.04.14, Tokyo

Calder. Rêver en Equilibre

Fondation Louis Vuitton, Paris

2026.04.15 - 2026.08.16

2026年4月15日から8月16日まで、フォンドーション ルイ・ヴィトン は、アレクサンダー・カルダー (1898-1976) の渡仏 100 周年および没後 50 周年を記念し、その創作のあらゆる側面を探る「Calder. Rêver en Équilibre」(カルダー 均衡のなかで夢見る) 展を開催します。本展は、パリの前衛たちを魅了した 1920 年代後半——《Cirque Calder》上演の最初期——から、1960 年代および 1970 年代——パブリック・アートという概念を再定義したモニュメンタルな彫刻——に至るまで、半世紀にわたるカルダーの創作をたどります。フランク・ゲーリーが設計した建築空間に浮遊するカルダーのモビールによって、展覧会全体がひとまとまりの動的構成として立ち現れます。

こんにちまでにアレクサンダー・カルダーに捧げられた展覧会のなかでも、ひときわ重要な位置を占める本展は、主要貸出元であるカルダー財団との緊密な協力のもとに構想されました。また、国際的機関および第一級の個人コレクターからの貸出により、約 300 点の作品が本展に集います。モビールとスタビル——運動する抽象と静止する抽象を指すカルダー独自の用語法に従えば——をはじめ、針金で制作された肖像、木彫、絵画、素描、さらには彫刻として構想されたジュエリーが、そこに含まれます。3000 平方メートルを超える空間にわたる年代順の展示構成を通じて、何よりもまず運動、さらに光、反射、身近な素材、音、儚さ、重力、パフォーマンス、正と負の空間、といったカルダーの根本的な芸術的関心が浮かび上がります。

本展は、周年を記念する展覧会として、カルダーの同時代人たちによる寄与も取り入れ、その射程をさらに広げています。彼の友人であるジャン・アルプ、バーバラ・ヘップワース、ジャン・エリオン、ピエト・モンドリアンの作品、ならびにパウル・クレーとパブロ・ピカソの作品は、カルダーのラディカルな発明性をアバンギャルドの協奏のなかに位置づける手がかりとなります。また、アンリ・カルティエ＝ブレッソン、アンドレ・ケルテス、ゴードン・パークス、マン・レイ、アーヴィング・ベン、アニエス・ヴァルダら、20 世紀を代表する写真家たちが撮影した 35 点の写真は、芸術と生の境界を往き来する芸術家の姿を映しだしています。「Calder. Rêver en équilibre」ではまた、カルダーの創作の要となるいくつかの作品群——とりわけ評価の高い連作〈Constellations〉や、魅惑的な躍動感を湛えたジュエリー——に焦点を当てたセクションも設けています。

ジャン＝ミシェル・バスキア、ジョン・ミッチェル、シャルロット・ベリアン、マーク・ロスコ、デイヴィッド・ホックニー、ゲルハルト・リヒターら、20 世紀および 21 世紀美術の重要作家たちに捧げられた当館での回顧展の流れを受けて、本展では、全展示空間をカルダーの作品に充てるとともに、初めて隣接する芝生をも展示に充てます。こうした試みにより、本展はまた、カルダーのヴォリューム、面、動きと、フランク・ゲーリーの建築における同要素との対話を生みだします。

FONDATION LOUIS VUITTON

画家の母と彫刻家の父をもち、祖父もまた彫刻家であったアレクサンダー・カルダーは、20代半ばに、まずペインティングとドローイングへと向かうことで、自らの出自へと立ち返ります。ニューヨークのアート・スチューデントズ・リーグで学んだ後、1926年にパリに居を定めます。モンパルナス地区で、カルダーはほどなくして、当時世界随一であった芸術の核心に溶け込んでいきます。そこでカルダーは、独自のフォルム、批評家たちの注目を集める具象的で簡潔な針金彫刻、そしてミニチュアのサーカスを提示します。ホイットニー美術館による特別貸出により、このたび《Cirque Calder》は15年ぶりに、それが創られたパリへ戻ります。この新しいかたちのスペクタクルのなかで、カルダーは、ますます多くの観衆の前に、ミニチュアの軽業師、道化師、騎手たちを操ります。フェルナン・レジェ、ジャン・エリオン、ル・コルビュジエ、ジャン・アルプ、ジョアン・ミロはその観客であり、ピエト・モンドリアンもまた、その場にいました。

1930年にカルダーがモンドリアンのアトリエを訪ね、そこでその場の空間の構成と色彩の構成に深い印象を受けたことは、彼の作品における抽象への転回を促します。それはまず絵画において、ついで彫刻において現れます。マルセル・デュシャンは、1932年にパリのギャラリー・ヴィニヨンでカルダーが発表した抽象的かつ動的なコンポジションに、〈モビール〉という名称を提案します。はじめは機械的に駆動され、ついで空気のかすかなざわめきに動かされるこれらのモビールは、1946年にジャン＝ポール・サルトルが記すように、「その生を、大気ははらむほのかな生氣から借り受けている」のです。〈スタビル〉については、アルプが、デュシャンの用語法への応答として、カルダーの静的なオブジェを指すこの語を提案します。

カルダーは1933年に米国へ戻るものの、その後もヨーロッパとの行き来を続けます。その行き来のなかで、1937年にはミロやピカソとともにスペイン共和国館に参加します。その後カルダーは終戦直後にフランスへ戻り、1953年にはロワール渓谷のサシュの集落にアトリエを構えます。米仏両国を拠点に、彼はその創作を展開し、1976年に他界するまで、〈彫刻〉という概念そのものを更新しつづけます。カルダーは、運動によって、さらには、わずかな息吹にも動き出す繊細な金属造形からモニュメンタルな構築物に至るまで、あらゆるスケールを貫く造形言語を発明することによって、自然と並び立つ非対象的な彫刻を創りだします。本展のゲスト・キュレーターであるディーター・ブッフハルトとアンナ・カーリーナ・ホーフバウアーが指摘するように、「カルダーの革新的な実践は、彫刻の次元を拡張し、そこに時間を本質的な第四の次元として含めた」のです。

キュレーター

スザンヌ・パジェ: フォンダシオン ルイ・ヴィトン 芸術監督、チーフキュレーター

ディーター・ブッフハルト、アンナ・カーリーナ・ホーフバウアー: ゲストキュレーター

ヴァランタン・ノイロート、クレール・ドゥティック: ゲストキュレーター補佐

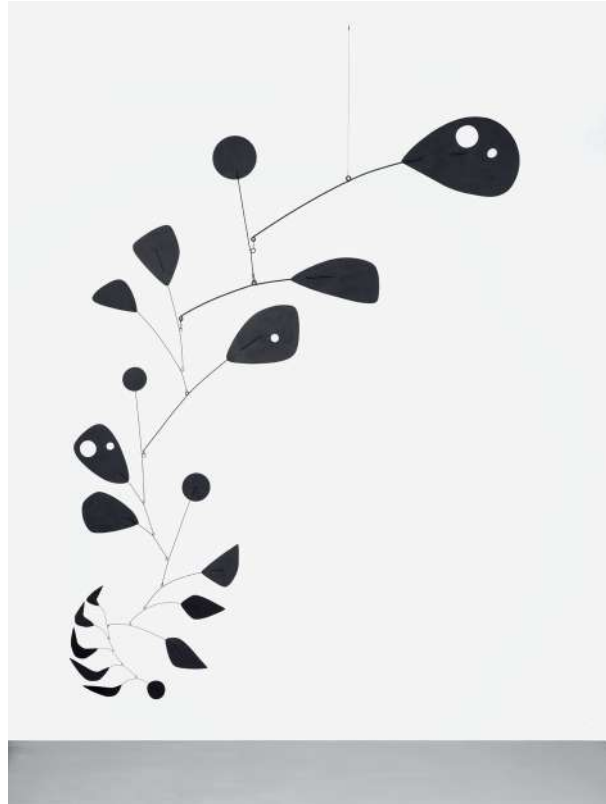
オリヴィエ・ミシュロン: アソシエイト・キュレーター

レナ・レヴィ: アソシエイト・キュレーター補佐

本展は、カルダー財団およびホイットニー美術館とのパートナーシップにより実現した。

展示内容と プレスヴィジュアル

Introduction



Alexander Calder,
***Black Widow*, 1948**

Feuille de métal, fil de fer et peinture
325.1 x 251.5 cm

Instituto de Arquitetos do Brasil – Departamento de São Paulo
On deposit from the Artist, 1948

© 2026 Calder Foundation, New York /ADAGP, Paris
Photo : Tim Nighswander / IMAGING4ART, courtesy of
Calder Foundation, New York / Art Resource, New York

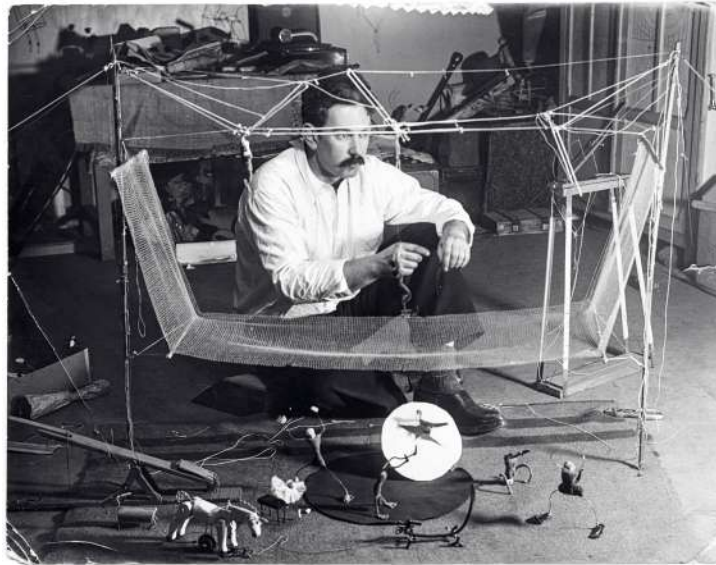
Galerie 1

形成期

芸術家の家系に生まれたアレクサンダー・カルダーは、幼少期から創造性と手仕事の感覚を培った。1923年にニューヨークのアート・スチューデントズ・リーグで絵画を学び、都市のスピード、スポーツ、サーカスの世界に魅了される。ギャラリー1では、こうした初期の関心が、のちの《Cirque Calder》や空間的な彫刻表現へとつながっていく、その出発点をたどる。1926年、彼はパリへ渡る。

カルダーのサーカス

1926年にパリへ着いたカルダーは、ミニチュアの《Cirque Calder》の制作に取りかかり、1931年頃まで演目を増やし続けた。人形や動物、仕掛け、布、小道具、楽器、レコード、運搬用トランクにいたるまでから成るこの世界は、単なるオブジェの集合ではなく、カルダー自身の手によって生きる実演芸術だった。彫刻と演劇の境界に生まれた《Cirque Calder》は、ハプニングやパフォーマンスに先立つ先駆的实践であり、運動、相互作用、縮尺の操作、技術的工夫を通じて、後のカルダー芸術の原点となった。



Sacha Stone,
Calder et le, *Cirque Calder (1926-1931)*, 1929

Tirage gélatino-argentique
27.9 x 35.6 cm

Calder Foundation, New York

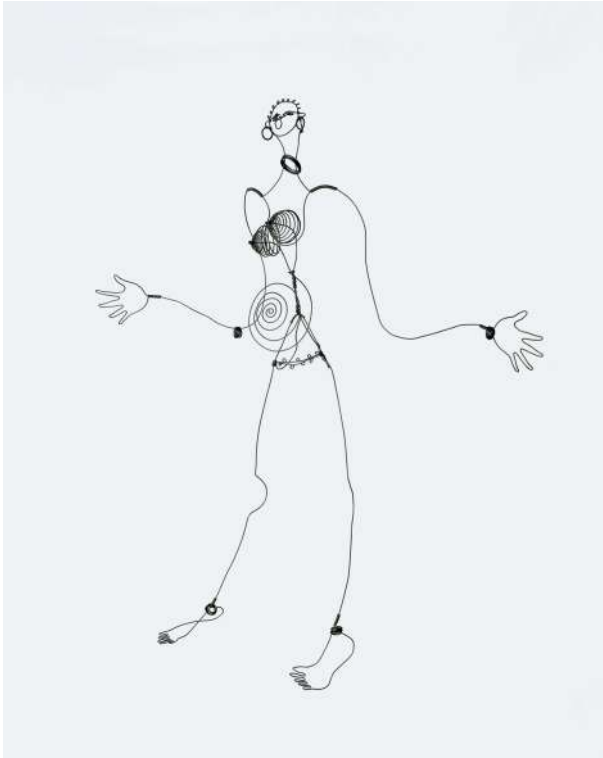
© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris

Photo courtesy of Calder Foundation, New York / Art Resource, New York

Galerie 1

針金の王

1920年代半ば、カルダーは《Cirque Calder》と並行して針金による彫刻に取り組み、自ら「三次元の線描」と呼ぶ独自の表現を切り開いた。彫刻の量塊を省き、線を空間へと解き放つこの手法は当時きわめて斬新で、批評家たちはそれを既存のジャンルに容易に収めることができなかった。最初期の作例には《Josephine Baker IV》も含まれ、軽やかで柔軟な素材は偶然の動きすら作品に取り込みうる。観察の鋭さと手技の巧みさによって、カルダーはデッサンを複数の次元で展開した。



Alexander Calder,
Josephine Baker IV, c. 1928

Fil de fer

100,5 x 84 x 21 cm

Musée national d'art moderne, Centre Pompidou, Paris
Don de l'artiste, 1966

© 2026 Calder Foundation, New York /ADAGP, Paris

Photo : Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist.

GrandPalaisRmn / Georges Meguerditchian

Alexander Calder,
The Brass Family, 1929

Fil de laiton et bois peint

170,2 x 104,5 x 22,5 cm

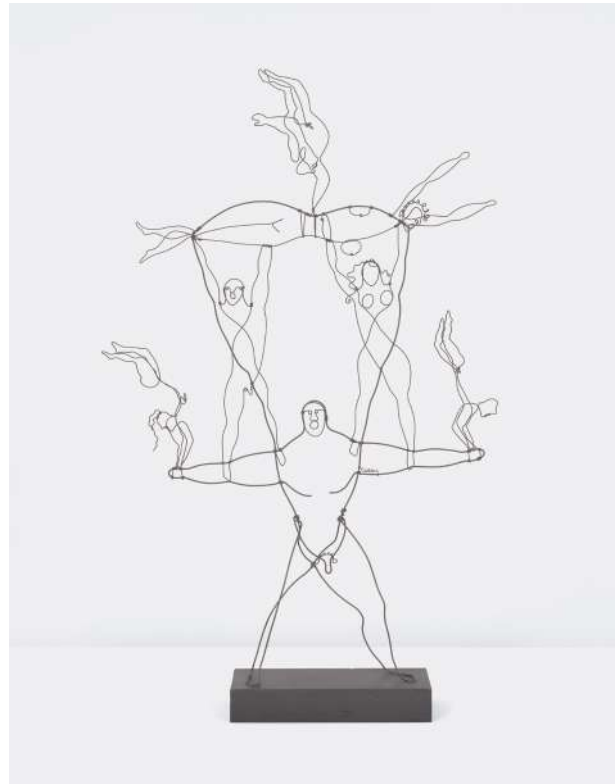
Whitney Museum of American Art, New York

Gift of the artist 69.255

© 2026 Calder Foundation, New York /ADAGP, Paris

Photo : Digital image Whitney Museum of

American Art / Licensed by Scala



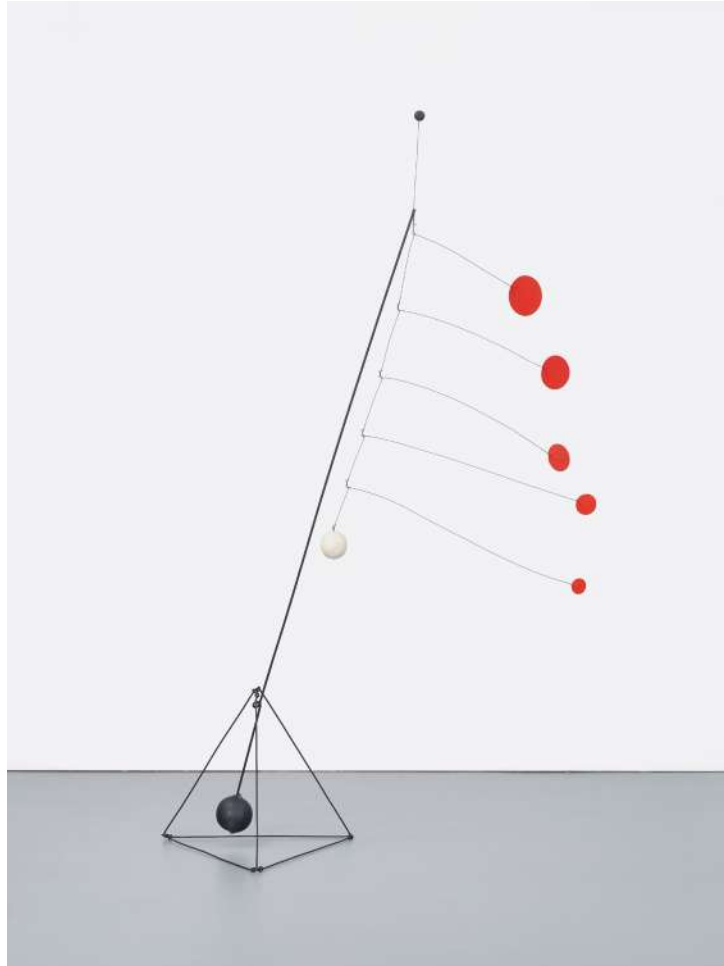
Galerie 2

非具象

1930年10月、カルダーはパリでピエト・モンドリアンのアトリエを訪ねた際に、その簡潔さと厳密さに強い衝撃を受けた。この経験を契機に、彼は具象的参照を完全に退けた絵画を制作し、まもなく探究の場を再び彫刻へと移す。1931年のギャラリー・ペルシエでの展示では、もはや人物像の痕跡は消え去り、針金という空間の線だけが過去の仕事との連続を示していた。フェルナン・レジェのいう「純粹造形」としての彫刻であり、さらに翌年には、デュシャンが「モビール」と名づけた運動する抽象彫刻のはじまりである。

1933 — ターニングポイント

1933年、ドイツでヒトラーが政権を掌握し、ヨーロッパに不安が広がるなか、カルダーは妻ルイザとともに米国へ戻る。この年、パリでの最後の個展は、彼の抽象芸術における新たな方向を明らかにした。それは、粗い素材や自然物、拾得物の導入、偶然や音の取り込み、さらには観者の位置づけの変化である。そこには、幾何学的語彙の更新を志向する潮流やシュルレアリスム周辺にも通じる、バイオモルフィックにたいする感性の萌芽がある。



Alexander Calder,
Object with Red Discs, 1931

Tige en acier peint, fil métallique, bois et feuille d'aluminium
222,3 x 132,7 x 62,2 cm

Whitney Museum of American Art, New York

Purchase, with funds from the Mrs. Percy Uris Purchase Fund 86.49a-c

© 2026 Calder Foundation, New York /ADAGP, Paris

Photo : Digital image Whitney Museum of American Art / Licensed by Scala

Galerie 4

ロクスベリーとニューヨーク

1933年にアメリカへ戻ったカルダーは、コネティカット州ロクスベリーの農家を拠点とし、自然のなかでの制作を通じて、新たな境地を切り拓いていく。屋外彫刻やスケールの探究は、風景や環境との関係を作品に組み込む契機となった。1937年にはパリ万博のスペイン共和国館に参加し、《Mercury Fountain》を発表。公共空間への介入志向もここで明確になる。絵画と彫刻、二次元と三次元、さらに時間と運動を契機に、カルダーは色彩の感覚をいっそう自由に広げた。

物質と生命のあいだ

カルダーは自然の形態を模倣するのではなく、風、気流、重力、水、人の気配といった力そのものを作品に作用させることで、運動、変化、不確定性を彫刻のうちに可視化した。彼のモビールは、芸術と自然、知覚が交わる現在の場において展開し、固定された形ではなく、力の動的な配置として存在する。1930年代末以降の作品には、《Yucca》や《Peacock》のように自然を想起させる題名もあるが、それらは自然の再現ではなく、抽象化され、分節され、再構成された形象を通じて、つねに生成を続ける世界の徴である。



Alexander Calder,

Yucca, 1941

Feuille de métal, fil de fer et peinture

103,5 × 38,1 × 27,9 cm

Collection Kenneth C. Griffin

Purchase, with funds from

the Mrs. Percy Urus Purchase Fund 86.49a-c

© 2026 Calder Foundation, New York /ADAGP, Paris

Photo courtesy of Calder Foundation, New York

/ Art Resource, New York

Alexander Calder,

Eucalyptus, 1940

Feuille de métal, fil de fer et peinture

240 x 154,9 cm

Calder Foundation, New York

Gift of Andréa Davidson, Shawn

Davidson, Alexander S. C. Rower & Holton Rower, 2010

© 2026 Calder Foundation, New York /ADAGP, Paris

Photo : Tom Powel Imaging, courtesy of Calder

Foundation, New York / Art Resource, New York





Alexander Calder,
***Apple Monster*, 1938**

Feuille de métal, fil de fer et peinture
103,5 × 38,1 × 27,9 cm

Calder Foundation, New York

Gift of Alexander S. C. Rower in memory of

Mary Calder Rower, 2015

© 2026 Calder Foundation, New York /ADAGP, Paris

Photo : Tom Powel Imaging, courtesy of Calder

Foundation, New York / Art Resource, New York

Alexander Calder,
***Bougainvillier*, 1947**

Feuille de métal, fil de fer, tige,
plomb et peinture
198,1 x 208,3 x 137,3 cm

Shirley Family Calder

Collection, promised Gift to the Seattle Art Museum

© 2026 Calder Foundation, New York /ADAGP, Paris

Photo courtesy of Calder Foundation, New York

/ Art Resource, New York



Galerie 5

魚たち

1940年代から50年代にかけて、魚はカルダーの吊り下げられたモビールに繰り返し現れる主題となった。ガラス片、陶片、瓶の口、歯車の部品、ボタンなどの廃材は、魚の略示的な輪郭のなかに配され、光を受けて鱗やステンドグラスのようなきらめきを放つ。カルダーは、魚の姿を写實的に再現するのではなく、その運動やリズムを示唆する。空気の流れのなかをゆっくり漂う魚たちは、時間と空間のうちで、水の世界そのものを創出する。



Alexander Calder,
***Devil Fish*, 1937**

Feuille de métal, boulons et peinture
171,7 x 162,6 x 119,4 cm

Calder Foundation, New York

© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris

Photo : David Heald, courtesy of Calder Foundation, New York

/ Art Resource, New York

Galerie 5

ゴングとタワー

1952年、カルダーはヴェネツィア・ビエンナーレで彫刻大賞を受賞し、同年ニューヨークのカート・ヴァレンティン画廊で「ゴングとタワー」と題する個展を開いた。ゴングは、動きに応じて小さな槌が金属円盤を打つモビールであり、音を作品の重要な次元として取り込む試みである。他方、タワーは壁面上部に取り付けられた針金の建築的構成体で、内部に小さなモビールや諸要素を抱え込みながら、脆さと確かさをあわせもって空間へと張り出していく。



Alexander Calder,
Lily of Force, 1945

Feuille de métal, boulons et peinture

270 x 250 x 160 cm

Fondation Louis Vuitton, Paris

© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris

Photo courtesy Primae / Louis Bourjac

Alexander Calder,
*Dispersed Objects with
Brass Gong, 1948*

Laiton, feuille de métal, fil de fer et peinture
48,3 x 167,6 cm

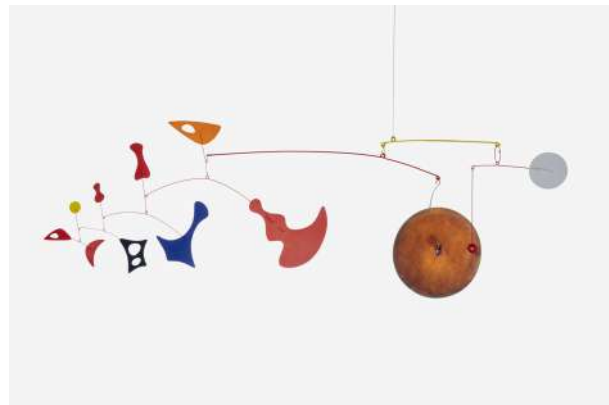
Shirley Family Calder Collection,
promised Gift to the Seattle Art Museum

© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris

Courtesy of Calder Foundation, New York / Art Resource

Photo : Courtesy of Calder Foundation, New York

/ Art Resource



Galerie 6

ブロンズ

1944年春、建築家ウォレス・K・ハリソンの提案をきっかけに、カルダーは屋外の大型作品を構想し、石膏による制作を開始した。そこから生まれた作品群は、1930年以來となるブロンズ鑄造へとつながる。ここでは、広く知られているモバイルやスタビルとは異なり、量感を備えたモデリングの痕跡が前景化する。しかし、それらは小さな雛形であってもなお、驚くほどの軽やかさと躍動を保っている。複数部分からなる作例には可動性も残され、ブロンズのなかに運動の契機が生き続けている。



Alexander Calder,
***The Helices*, 1944**

Bronze (en trois parties)

80 x 79,4 x 61 cm

Calder Foundation, New York

© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris

Photo : Tom Powel Imaging, courtesy of Calder Foundation, New York

/ Art Resource, New York

Galerie 6

携行する彫刻

カルダーは1906年、妹ベギーの人形のために最初の装身具を作ってから、1920年代末から本格的にジュエリー制作に取り組んだ。真鍮線をペンチで曲げ、ガラス片や陶片を宝石のように組み込み、のちには銀、時に金も用いて、ひとつひとつ異なる作品を生みだした。廃材を活かしたそれらのジュエリーは、小さな形式のなかにカルダーの造形の本質を凝縮するものであり、幾何学的形態や自然の力の表現に加え、オセアニア、プレコロンブス期、アフリカの美術からも着想を得ている。妻ルイザをはじめ、親しい人々との関係の軌跡もまた、そこに刻まれている。



Alexander Calder,
***Harps and Heart*, c. 1937**

Laiton

Diamètre : 101,6 cm;

éléments : 15,9 cm x 10,2 cm

Calder Foundation, New York

© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris

Photo : Maria Robledo, courtesy of Calder Foundation, New York

/ Art Resource

Photographies

カルダーの肖像



Ugo Mulas,
Calder with Snow Flurry (1948),
Saché, 1963

Tirage gélatino-argentique
30,5 x 22,9 cm

Calder Foundation, New York
© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris
Courtesy of Calder Foundation, New York /
Art Resource, New York
© Ugo Mulas



Gordon Parks,
Calder with Snow Flurry I (1948),
Roxbury, 1952

Tirage gélatino-argentique
34,3 x 27 cm

Calder Foundation, New York
© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris
Courtesy of Calder Foundation, New York /
Art Resource, New York
© The Gordon Parks Foundation



Herb Weitman,
*Calder with Southern Cross (1963),
and Back from Rio (1959),
Roxbury, c.1963*

Tirage gélatino-argentique
35,6 x 27,9 cm

Calder Foundation, New York
© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris
Courtesy of Calder Foundation, New York /
Art Resource, New York
© Herb Weitman, St. Louis.

Herbert Matter,
*Calder dans son atelier de Roxbury,
1941*

Tirage gélatino-argentique
27,9 x 27,9 cm

Calder Foundation, New York
© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris
Courtesy of Calder Foundation, New York /
Art Resource, New York



Galerie 7

コンステレーション — 星座

シリーズ〈Constellations〉は、戦時下の素材不足のなかで、1942年から43年にかけてロクスベリーで制作された。木片と針金から成るこれらの作品は、1929年の木彫《The Crowd》を切断し、碎き、再構成する試みを遠い起点として生まれている。クルミ、オーク、紫檀などの木片は、繊細で開かれた構成のうちに空間へと配置され、固定されたものもあれば動くものもある。1943年、ニューヨークのピエール・マティス画廊で初めて発表されたこれらの作品は、展示空間そのものをひとつの作品へと変容させた。



Alexander Calder,
***Constellation*, 1943**

Bois, fil de fer et peinture

72,4 x 45,7 x 27,9 cm

Calder Foundation, New York

© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris

Photo courtesy of Calder Foundation, New York

/ Art Resource, New York

Alexander Calder,
***Morning Star*, 1943**

Feuille de métal, fil métallique,
bois et peinture

203,2 x 101,6 x 101,6 cm

The Museum of Modern Art, New York

Gift of the artist

© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris

Photo : Digital image, The Museum of Modern Art,

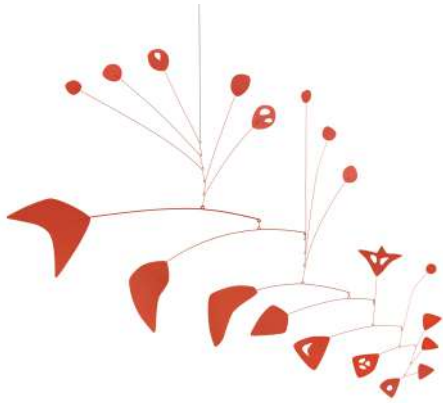
New York / Scala, Florence



Galerie 9

風の彫刻家

1946年、批評家Gabriel Périはカルダーを「風の彫刻家、月の鍛冶屋」と呼び、その作品の詩性と崇高さを言い表した。同年、サルトルもまた、空気を糧にし、大気の曖昧な生命に生かされる存在としてモビールを捉えている。1941年から61年にかけて制作された優れた作例が集められたこのギャラリーは、カルダーがいかにして運動そのものを彫刻の核心としたかを追求している。中央に置かれた《La Grande vitesse》の模型もまた、周囲の気流をいっそう鋭く可視化している。



Alexander Calder,
Red Maze III, 1954

Feuille de métal, fil de fer et peinture
142,2 x 182,9 cm

Calder Foundation, New York
© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris
Photo courtesy of Calder Foundation, New York /
Art Resource, New York

Alexander Calder,
Paulette, 1948

Feuille de métal, ficelle,
fil de fer et peinture
118.7 × 142.9 × 50.8 cm

Collection Kenneth C. Griffin
© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris
Photo : Courtesy of Sotheby's, Inc. 2025.



Alexander Calder,
La Grande vitesse
(maquette intermédiaire 1/5), 1969

Feuille de métal, boulons et peinture
259,1 x 342,9 x 236,2 cm

Calder Foundation, New York
© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris
Photo courtesy of Calder Foundation, New York /
Art Resource, New York

Galerie 11

クラッグスとクリッターズ

カルダーは晩年にいたるまで、新たな方向を探り続けた。1974年、没後わずか二年前に取り組んだ〈Critters〉では、ふたたび形象性への接近が見られる。ブラジルの批評家マリオ・ペドロサが「転回」と呼んだこれらの作品は、つねに変形の途上にある生きもののような気配をたたえている。これと同時に発表された〈Craggs〉では、中国の文人石のような黒い金属板の上で、白、もしくは鮮やかな色彩の可動構造体が危うい均衡を保っており、カルダー晩年の造形的緊張が鮮やかに顕れている。



Alexander Calder,
Critter innommable, 1974

Feuille de métal et peinture

194.3 x 95.3 x 74.9 cm

Calder Foundation, New York

© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris

Photo courtesy of Calder Foundation, New York / Art Resource, New York

Galerie 10

モニュメンタル

カルダーのスケールについての感覚は、宇宙の広大さとその力動に呼応している。したがって彼の作品は、拡大にも縮小にも開かれている。彫刻家の家系に生まれ、公的委嘱による大型作品の技術的・構想的条件を早くから身につけていた彼は、1930年代半ば以降、屋外の大規模作品に取り組み、晩年には巨大な彫刻群を生みだした。それらは単に空間を占めるのではなく、空間を分節し、重力、身振り、空隙の相互作用からなる力の場を生成する。鑑賞者はそれらに身体的に出会うことで、気流や音、そして自らの動きまでも意識することになる。



Alexander Calder,
***Southern Cross*, 1963**

Feuille de métal, tige, boulons et peinture

617,2 x 823 x 535,9 cm

Calder Foundation, New York

© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris

Photo courtesy of Calder Foundation, New York / Art Resource, New York

国内媒体関係者各位

本ファイルに収録されたすべての作品画像は、著作権により保護されています。ご利用の際は、〈presse@adagp.fr〉までご連絡ください。ご申請は、ADAGP の提携著作権管理団体へ転送されます。

作品画像を掲載する場合は、画像の入手元または作品の所蔵元にかかわらず、作品名、作家名、ならびに掲載年を付した「© 2026 Calder Foundation, New York / ADAGP, Paris」のクレジットを、明瞭かつ判読可能な形で必ず付記してください。

画像ファイルは下記 URL よりダウンロードしてご利用ください。

<https://presse.fondationlouisvuitton.fr/calder-rever-en-equilibre-en/>

FONDATION LOUIS VUITTON

FONDATION LOUIS VUITTON

Bernard Arnault *President, Administrator*

Jean-Paul Claverie *Advisor to the President*

Suzanne Pagé *Artistic Director*

Sophie Durrleman *Executive Director*

Press contacts

Fondation Louis Vuitton

Sébastien Bizet *Director of Communication*

Caroline Cadinot *Press and Public Relations Officer*

Joonam Partners

Roya Nasser: + 33 (0)6 20 26 33 28

Pierre-Edouard Moutin : +33 (0)6 26 35 51 57

fondationlouisvuitton@joonampartners.com

For JP press

afumi inc.

佐藤ビンゴ : Bingo Sato

info@afumi.co.jp

03-6451-1568